



Title	体言化と名詞句用法標識の関係 : 韓国語 kesの歴史的展開を中心に
Author(s)	鄭, 聖汝
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2021, 61, p. 175-209
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

体言化と名詞句用法標識の関係

—韓国語 *kes* の歴史的展開を中心に—*

鄭 聖 汝

要旨

本稿は、韓国語の伝統文法において依存名詞、形式名詞などと呼ばれてきた *kes* に焦点を当て、Shibatani (2017, 2018, 2019) の体言化理論の観点から、その関連形式に対する再分析を行ったものである。通時論的にみると、*kes* は歴史的には後発であり、中世韓国語までは *kes* がいない構造でもヒト・モノ・コトを表す準体言を作ることができた。これは、*kes* はいわゆる形式名詞などではなく「名詞句用法標識」であり、*kes* の前にくる要素が体言化辞であることを、歴史的発達の観点から実証するものである。加えて、韓国語の名詞句用法標識そのものも *-i > kes* への歴史的展開があったことも指摘する。これらの事実から、従来の「VP- 連体形 + *kes* (形式名詞・依存名詞・体言化辞)」および「NP- 属格 + *kes* (形式名詞・依存名詞)」の見方は、本稿では次のように再分析される。

- ・用言基盤体言化 (名詞句用法) : 「VP- 体言化辞 *-n/l* + *kes* (名詞句用法標識)」
- ・体言基盤体言化 (名詞句用法) : 「NP- 体言化辞 *-uy/s* + *kes* (名詞句用法標識)」

この分析のポイントは、*kes* の前には必ず体言化辞がくること、そして、体言化は *kes* と独立して行なわれることを主張する点にある。このような分析は、言語の歴史的事実および歴史的発達の産物である現代韓国語の事実の両方と合致する点で、従来の分析より優れていると言える。

キーワード： 体言化理論、用言基盤体言化、体言基盤体言化、準体言、体言化辞、名詞句用法標識、歴史的展開

1. はじめに

現代韓国語の *kes* を取り巻く問題を考える際に、他言語、とりわけ日本語や中国語と対比してみると、韓国語の内部を観察するだけでは思いつかない、新たな、説明すべき問題が浮上することに気づく。(2) と (3) は、(1) の日本語にそれぞれ対応する表現である。これらの文を、Shibatani (2017, 2018, 2019) の体言化理論の観点から捉えてみると、以下のようになる¹⁾。

* 本稿は、『体言化理論と言語分析』(2021)に掲載された論文「体言化と名詞句用法標識の関係——歴史的発達の観点から見た日本語の「の」と韓国語 *kes* の比較を通して——」の一部であり、韓国語の *kes* に絞ってさらに指示代名詞の分析を加えたものである。本研究は、科学研究費助成金・基盤研究C(課題番号 7K02681)及び大阪大学国際共同研究促進プログラム(2015～2018年度)の支援による研究成果である。

<日本語>

- (1) a. [赤いの]_{NP} (を見せてください。) 【用言基盤体言化・名詞句用法】
 b. [僕の]_{NP} (はどれ?) 【体言基盤体言化・名詞句用法】

<中国語>

- (2) a. (给我看) [红的]_{NP} 【用言基盤体言化・名詞句用法】
 b. (哪个是) [我的]_{NP}? 【体言基盤体言化・名詞句用法】

<韓国語>

- (3) a. [ppalka-n kes]_{NP} (-ul poye-cwu-seyyo.) 【用言基盤体言化・名詞句用法】
 b. [na-uy kes]_{NP} (-un eneke-ya?) 【用言基盤体言化・名詞句用法】

(1-3) はすべて名詞句構造であるが、その中で (a) は、用言「赤い」に日本語は「の」、中国語では「的」が付き、それぞれ準体言（注5参照）の名詞句（NP）を作っている。Shibatani によると、これは**用言基盤体言化**（verbal-based nominalization）であり、またその名詞句用法（NP-use）となる。ところが、韓国語をみると、用言語幹に *-n* が現れ、その後 *kes* が加わって同様の名詞句構造を作っていることがわかる。また (b) は、人称代名詞を基盤にして準体言の名詞句を作っている。これは**体言基盤体言化**（nominal-based nominalization）であり、その名詞句用法とされる。この場合も、人称代名詞（体言）に日本語は「の」、中国語は「的」だけが付くが、韓国語は用言基盤体言化の場合と異なり、いわゆる属格の *-uy* がきて、その後に *kes* がさらに加わって名詞句構造を作ることになる（日本語の「の」に関する詳細な分析は鄭（2021a）を参照）。

すなわち、現代韓国語には次の三つの特徴が見られる。まず第一に、用言基盤であれ体言基盤であれ、準体言の名詞句（正確には名詞句用法）には、必ず *kes* が用いられる。第二に、用言基盤体言化には、*kes* の前にいわゆる連体形語尾 *-n*（または *-l*）が現れる。第三に、体言基盤体言化には、*kes* の前にいわゆる属格 *-uy*（または *-s*）が現れる、という点である。

本稿では、Shibatani の体言化理論の観点から、*kes* とその前にくる関連形式を再分析し、次のことを明らかにする。(i) *kes* は体言化された構造の後に付く形式である。つまり、体言化によって作られた準体言が名詞句用法であることを明示するために用いられるサイン、す

1) 韓国語の文字表記は Yale Romanization System を用いる。中世韓国語において現在消滅した文字・音声は次のように大文字で表記する。A [ɔ]: 半開後舌円唇母音、Aleya; S [z]: 有声齒茎摩擦音（半齒音）、Half-Sios; H [ʔ]: 声門破裂音、Old Hiuh; B [β]: 有声両唇摩擦音; I [ŋ+i]: 有声軟口蓋鼻音（牙音、Old lung）+ 母音 [i]。中世語資料の漢字表記は現代語の音価で表記する。例) 願望: wuenmang (원망)、如来: yelay (여래) など。

なわち**名詞句用法標識** (NP-use marker) である。(ii) *kes* の前にくる *-n* (または *-l*) はいわゆる用言の連体形語尾などではなく、用言基盤体言化のための体言化辞 (以下、用言基盤の体言化辞) である。(iii) *kes* の前にくる *-uy* (または *-s*) はいわゆる属格助詞などではなく、体言基盤体言化のための体言化辞 (以下、体言基盤の体言化辞) である。本稿では *kes* の歴史的展開を考察することによって、これらの点を検証する。

以下では、2 節で *kes* とその関連形式に対する先行研究での扱い方およびその問題点を検討する。3 節では、体言化理論における体言化辞と名詞句用法標識の区別について述べる。続いて、4 節では現代韓国語に対する新しい分析を提案し、5 節では準体言の歴史的発達と *kes* の歴史的展開を考察する。6 節では全体をまとめて結論を述べる。

2. 先行研究における扱い方とその問題点

本節では、従来の研究では (3) に見られる *kes*, *-n*, *-uy* の三つの形式をそれぞれどのように捉えてきたのかに関して、伝統文法から最近の研究までを概観し、その問題点を明らかにする。

まず、これらの形式に対する伝統文法の考え方をみると、*kes* には「依存名詞」(許 1973, 1975)、「不完全名詞」(崔 1932, 1937/1994)、「形式名詞」(丁 1946)、「代名詞」(周 1910) など様々な用語が用いられている (王 1990 参照)。現代韓国語学では主として「依存名詞」(形式名詞に相当) が定着しているように思われる。*-n* と *-uy* に関しては、前者には「冠形詞形語尾」、「動名詞形語尾」などの用語が用いられ、基本的には日本語の用言の連体形に対応する。後者も「属格助詞」、「冠形格助詞」などと呼ばれることから、名詞類を修飾する格助詞として認識されていることがわかる。

しかし、Horie (2011) や Rhee (2011) らの最新の研究では、伝統文法の捉え方と若干異なった扱いがなされている。彼らは *kes* を「体言化辞」(nominalizer) であると主張しているのである²⁾。しかしながら、その前にくる *-n* については、従来通り用言の連体形 (attributive, adnominalizer) として扱われる。

一方、生成文法の枠組みでは、*kes* を補文標識 (complementizer) とする見方 (Lee 1970, Yang 1972 など) と、先行する *-n* を補文標識とする見方 (Park 1972, 任 1974 など) の、二つの異なる立場が混在している。前者の立場だと、補文標識 *kes* に先行する *-n* をどのように扱っているかが必ずしも明確でないところがある。後者では、補文標識 *-n* に後続する *kes* を、伝統文法と同様に不完全名詞ないし補文名詞 (Park 1972, 任 1974) と見なすことになる。

このように韓国語学では、*kes* を名詞の一種として見る立場 (伝統文法、生成文法) と体

2) より正確にいうと、Rhee (2011) は *kes* を「体言化辞として機能する不完全名詞 (defective noun)」と見ている。

言化辞として見る立場（Horie、Rhee）があり、*-n* については用言の「冠形詞形語尾」（伝統文法）とする見方と、補文標識（生成文法）とする見方がある。一方、*-uy* については「冠形格助詞」（属格助詞）という統一した見解が示されており、これについては殆ど疑いがないように思われる。

しかし、以上のような韓国語学の捉え方には、実はこれらの三形式全ての議論において問題があると言わざるを得ない点が存在する。まず第一に、*kes* を一種の名詞（ないし体言化辞）として見なすことであるが、この考え方が支持される背後には *kes* がモノ (thing) を表すという意味的基盤がある。ところが、現代韓国語の *kes* は日本語のモノと異なり、名詞としての機能は有しないのである³⁾。つまり、日本語では「モノを大事にしてください」という文が成立するが、それに対する韓国語の「**kes-ul socwunghi ha-sey-yo.*」は不適格である。これはちょうど、日本語において「*のを大事にしてください」という表現が不適切であるのと同じである。また、歴史的にも、*kes* がモノの意味を表す名詞として機能していたという証拠もない。つまり、先行研究において *kes* に帰属すると想定されているモノという意味は、実際は、*kes* そのものからくるのではなく、それがマークする体言化された構造 (nominalized structure) に由来するものであり（すなわち *kes* は体言化された構造の後に付くものである）、その構造が *kes* とともに体言に準ずる意味を表すことになる应考虑すべきなのである（詳しくは 4 節と 5 節参照⁴⁾）。

第二に、*-n* はそもそも用言の「冠形詞形語尾」（連体形を作る語尾）なのかという問題である。つまり、上述したように、*kes* を名詞（の一種）と見なすことができない場合、*-n* は名詞を修飾する連体形の構造を有しているとは言えなくなるのである。5 節で詳細に取り上げるが、連体形語尾の後に付く *kes* は歴史的に後発であり、古くは *-n* の後に *kes* が現れず、*-n* 形式だけでも許容されていたのである。この状況をわかりやすく現代語で表すと、[*ne-ka sa-n*]_{NP} (*-ul poyecwue*)（あなたが買った（のを見せて））のような文が、中世韓国語（とそれ以前）においては可能な表現であった。もちろん現代語では *-n* の後に *kes* が要求されるため、この文は不適格である。つまり、*-n* 形式は、連体形語尾として機能する必要のない文脈、すなわち名詞を修飾しない文脈においても使用できたわけである。

このことから、Horie (2011) や Rhee (2011) が、*kes* は体言化辞であり、その前にくる *-n* は連体形であるとした分析に対しても、本稿では *-n* が体言化辞であり、*kes* は体言化辞 *-n* によって作られた名詞句に加わって、それが（修飾用法ではなく）名詞句用法であることをより明確に表示するために用いられた、名詞句用法標識 (NP-use marker: NPM) であると分

3) 李崇寧 (1975: 105) も、*kes* について「不完全や形式云々の名詞ではなく、一種の形態素のような機能を帯びている」と指摘している。

4) 柴谷方良教授のご教示による。

析することができる。

第三に、-uy も果たして属格助詞（ないし冠形格助詞）なのかという問題がある。本稿では、-uy は属格などではなく、（体言基盤体言化のための）体言化辞であると分析する。このことは以下で議論する。

3. 体言化辞と名詞句用法標識の区別

本節では、体言化辞と名詞句用法標識はどのように区別されるかについて検討する。

Shibatani (2017, 2018, 2019) は、体言化辞と名詞句用法標識の区別について、次のようにまとめている。体言化辞は、準体言⁵⁾ (grammatical nominalizations, or quasi nominal) を使用する全コンテキスト——名詞句用法と修飾用法——において現れるが、他方の名詞句用法標識は修飾用法には現れず、名詞句用法にのみ現れる。

中国語の例を見てみよう。中国語の *de* (的) は、この形式によって作られる全コンテキスト、すなわち名詞句用法と修飾用法の両方に用いられる。この場合 *de* は体言化辞である。また中国語の体言化辞 *de* は、用言基盤準体言と体言基盤準体言の両方ともに用いられるという特徴がある。「的」に関する以下の分析は、Shibatani (2018: 390-391, 2019: 115) を参照した。

<用言基盤準体言>

- (4) a. (*Gěi wǒ kàn*) [*nǐ mǎi de*]_{NMLZ}_{NP} ((給我看) 你买的) (名詞句用法)
私に見せて あなた 買う NMLZR
「あなたが買ったの (を見せて)」
- b. (*Gěi wǒ kàn*) [*nǐ mǎi de*]_{NMLZ} *shū* ((給我看) 你买的書) (修飾用法)
私に見せて あなた 買う NMLZR 本
「あなたが買った本 (を見せて)」

5) 山田 (1908) による用語。体言化理論では、文法的体言化によって作られた、体言に準ずる語を言う。すなわち、体言化辞を用いて前の要素を体言化 (nominalization) した結果、出来上がった単位が準体言である。本論で取り上げる例では、準体言の単位は NMLZ で表記される。また準体言は普通の名詞と同様に (「シルクを買った」(名詞句用法) と「シルクスカーフ」(修飾用法) の「シルク」のように)、名詞句用法と修飾用法の二用法をもつ。

<体言基盤準体言>

- (5) a. (Gěi wǒ kàn) [nǐ **de**]_{NMLZ}NP ((給我看) 你的) (名詞句用法)
 私に見せて あなた NMLZR
 「あなたの (を私に見せて)」
- b. (Gěi wǒ kàn) [nǐ **de**]_{NMLZ} shū ((給我看) 你的書) (修飾用法)
 私に見せて あなた NMLZR 本
 「あなたの本 (を見せてください)」

一方、韓国語をみると、用言基盤準体言には *-n* が用いられ、もう一方の体言基盤準体言には *-uy* が用いられることから、中国語の *de* とは異なる状況を示している。一方で、*-n* と *-uy* によって作られる準体言は、それぞれ名詞句用法と修飾用法の全コンテキストに現れる点で、*de* と同様に体言化辞であることがわかる。すなわち、*-n* は用言基盤の体言化辞であり、*-uy* は体言基盤の体言化辞である。一方、用言基盤準体言であれ、体言基盤準体言であれ、体言化辞によって作られた準体言が修飾用法の場合には *kes* は現れないが、名詞句用法の場合には必ず現れる。このことから、*kes* は名詞句用法標識 (NPM) であると判断できる。

<用言基盤準体言>

- (6) a. [[*ne-ka* *sa-n*]_{NMLZ} **kes**]_{NP} (*-ul poyecwue*) (名詞句用法)
 あなた-NOM 買う-PRF.NMLZR NPM (-ACC 見せて)
 「あなたが買ったの (を見せて)」
- b. [*ne-ka* *sa-n*]_{NMLZ} chayk (*-ul poyecwue*) (修飾用法)
 あなた-NOM 買う-PRF.NMLZR 本 (-ACC 見せて)
 「あなたが買った本 (を見せて)」

<体言基盤準体言>

- (7) a. [[*ne-uy*]_{NMLZ} **kes**]_{NP} (*-ul poyecwue*) (名詞句用法)
 あなた-NMLZR NPM (-ACC 見せて)
 「あなたの (を見せて)」
- b. [*ne-uy*]_{NMLZ} chayk (*-ul poyecwue*) (修飾用法)
 あなた-NMLZR 本 (-ACC 見せて)
 「あなたの本 (を見せて)」

ここで、本稿で導入する新しい用語を提案する。(i) いわゆる属格助詞などと呼ばれてき

た韓国語の *-uy, -s* は、体言基盤の体言化辞である。(ii) いわゆる用言の連体形語尾として扱われてきた韓国語の *-n, -l* の形式は、用言基盤の体言化辞である。(iii) いわゆる依存名詞・形式名詞などと呼ばれてきた韓国語の *kes, -i* は、名詞句用法標識（名詞句用法において準体言の指示的機能をより明確に指し示すサイン）である。上述の *-s, -l, -i* などの形式は、4 節と 5 節で詳細に取り上げる。

なぜこのような分析がより良いのか。また現代韓国語において、[VP/NP-nominalizer]（動詞句・名詞句＋体言化辞）の後にさらに名詞句用法標識 *kes* が加わる構造はどのように生じたのだろうか。以下ではこの点を検証するが、その前に現代韓国語の状況を検討する必要がある。

4. 現代韓国語に対する新しい分析

本節では、体言化理論の観点から現代韓国語を分析し、次のような分析結果を提案する。(i) 用言基盤準体言と体言基盤準体言の両方において、名詞句用法では体言化辞の後に名詞句用法標識 *kes* が必ず現れるが、修飾用法には現れない。(ii) 用言基盤準体言では、名詞句用法・修飾用法の両方において、体言化辞 *-n* または *-l* のいずれかが必要である。(iii) 体言基盤準体言の名詞句用法では、*kes* の前に体言化辞 *-uy* または *-s* のいずれかが現れる。

まず用言基盤準体言について考察してみよう。(8) は名詞句用法、(9) は主名詞（ケーキ、茶）を修飾する修飾用法の例である。両方とも用言基盤の体言化辞 *-n* または *-l* が付き、準体言を作る。二つの体言化辞のうち、*-n* は過去（・完了）または現在時制（形容詞など状態述語の場合）を表す場合に用いられるのに対し、*-l* はまだ起きていない未来の事態（あるいは非現実事態）を表す場合に用いられる。つまり、用言基盤の体言化辞が、時制やアスペクトとも密接に結びつき、二つの機能を同時に担うことがわかる⁶⁾。一方、名詞句用法標識 *kes* は名詞句用法にのみ用いられ、修飾用法には現れない。*kes* が用いられた準体言の名詞句用法は [[VP-*n/l*]_{NMLZ} *kes* _{NPM}]_{NP} の構造となる。

<用言基盤準体言>

- (8) a. akka mek-un ke(s)-y mwue-y-eyo? (名詞句用法)

先 食べる-PRF.NMLZR NPM-NOM 何-COP-POL.INT

「先ほど食べたのは何ですか。」

6) ここでは時制よりアスペクトに重点を置き、*-n* のグロスには PRF.NMLZR とする。5 節で見るように、体言化辞 *-n* は、その前にさらに現在形・過去形など動詞語幹に付く時制形式があることも可能である。

- b. *yeki masi-l kes com cwu-sey-yo.* (名詞句用法)
 ここ 飲む-FUT.NMLZR NPM 少し くれる-HON-POL.IMP
 「こちらに飲み物(飲むモノ)を少しください。」
- (9) a. *akka wuli-ka mek-un kheyikhu-nun enu ke(s)-y-eyo?*
 先 私たち-NOM 食べる-PRF.NMLZR ケーキ-TOP どれ-COP-POL.INT
 「先ほど私たちが食べたケーキはどれですか。」 (修飾用法)
- b. *yeki wuli-ka masi-l cha com cwu-sey-yo.* (修飾用法)
 ここ 私たち-NOM drink-FUT.NMLZR 茶 少し くれる-HON-POL.IMP
 「こちらに私たちが飲むお茶を少しください。」

次に体言基盤準体言について見てみよう。名詞句用法では、(10)のように名詞句用法標識 *kes* が用いられ、その前に体言基盤の体言化辞(いわゆる属格) *-uy* または *-s* のいずれかが現れる。この二つの体言化辞のうち、*-uy* はかしこまったフォーマルなコンテキストで用いられるのに対し、*-s* はインフォーマルでカジュアルなコンテキスト(話しことば)で用いられる。またこの *-s* は *kes* と結びついて、*-s ke(s) > -ske > -kke* のように濃音化を引き起こす。一方、修飾用法では、(11)のように名詞句用法標識 *kes* は現れない。さらに話しことばになると、(11b)のように体言化辞 *-uy* は普通省略される。つまり、名詞句用法標識 *kes* は名詞句用法にのみ現れ、修飾用法には現れないこと、この場合準体言の名詞句用法は、 $[[NP-uy/s]NMLZ\ ke(s)\ NPM]_{NP}$ の構造を取ることがわかる。

<体言基盤準体言>

- (10) a. *Tana-uy kes-ul cwu-sey-yo.* (名詞句用法)
 名前-NMLZR NPM-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「タナのをください。」
- b. *Tana kke(-lul) cwu-sey-yo.* (名詞句用法)【話しことば】
 名前 NMLZR.NPM(-ACC) くれる-HON-POL.IMP
 「タナのをください。」
- (11) a. *Tana-uy chayk-ul cwu-sey-yo.* (修飾用法)
 名前-NMLZR 本-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「タナの本をください。」
- b. *Tana chayk-ul cwu-sey-yo.* (修飾用法)【話しことば】
 名前 本-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「タナの本をください。」

以上、現代韓国語の準体言の二用法はそれぞれ次のような構造を示す。

<用言基盤準体言>

(12) 名詞句用法

- a. [[[Tana-ka mek]_{VP} -un]_{NMLZ} **kes** _{NPM}]_{NP} (-ul cwu-sey-yo)
「タナが食べたの」(をください)
- b. [[[Tana-ka masi]_{VP} -l]_{NMLZ} **kes** _{NPM}]_{NP} (-ul cwu-sey-yo)
lit. 「タナが飲むの」(＝タナが飲むためのモノ)(をください)

(13) 修飾用法

- a. [[Tana-ka mek]_{VP} -un]_{NMLZ} kheyikhu (-lul cwu-sey-yo)
「タナが食べたケーキ」(をください)
- b. [[Tana-ka masi]_{VP} -l]_{NMLZ} cha (-lul cwu-sey-yo)
lit. 「タナが飲む茶」(＝タナが飲むためのお茶)(をください)

<体言基盤準体言>

(14) 名詞句用法

- a. [[[Tana]_{NP} -uy]_{NMLZ} **kes** _{NPM}]_{NP} (-ul cwu-sey-yo)
「タナの」(をください)
- b. [[[Tana]_{NP} -s]_{NMLZ} **ke(s)** _{NPM}]_{NP} (-lul cwu-sey-yo) 【話しことば】
「タナの」(をください)

(15) 修飾用法

- a. [[Tana]_{NP} -uy]_{NMLZ} chayk (-ul cwu-sey-yo)
「タナの本」(をください)
- b. [[Tana]_{NP} ϕ]_{NMLZ} chayk (-ul cwu-sey-yo) 【話しことば】
「タナの本」(をください)

準体言を作るには、名詞句用法・修飾用法の両方とも体言化辞が必要であり、用言基盤準体言では**体言化辞 -n, -l**、体言基盤準体言では**体言化辞 -uy, -s** がそれぞれ用いられる。体言化辞の機能は、その前の要素を体言化して準体言を作ることであるが、用言基盤の体言化辞 -n, -l の場合は、それと同時に過去（完了）・現在・未来など時制も表し、二つの機能を同時に担うことになる。また準体言の名詞句用法には、必ず名詞句用法標識 **kes** が用いられる。つまり、用言基盤準体言と体言基盤準体言の両方に **kes** が現れる。

現代韓国語において、名詞句用法標識 **kes** が必ず要求されるこの状況は、一体どのように

生じたのだろうか。次節では準体言の歴史的発達を中心にこの点を考察する。

5. 韓国語における準体言の歴史的発達

本節では、古代韓国語（8-14 世紀の文献語）と中世韓国語（15-16 世紀の文献語）を取り上げ、当時の用言基盤準体言と体言基盤準体言の二用法——名詞句用法と修飾用法——を考察する。古代韓国語および中世韓国語では、名詞句用法標識 *kes* が付かず、体言化辞 *-n, -l* だけで名詞句用法を作れること、また体言基盤準体言でも、名詞句用法標識 *kes* が付かず、体言化辞 *-s* だけで名詞句用法を成立させるものがあることを明らかにする。さらに名詞句用法標識の発達についても考察し、中世韓国語には名詞句用法標識 *-i* があり、のちに、*-i* から *kes* へと交代し *kes* の勢力が拡張していく様子を、中世韓国語コーパス資料⁷⁾を通して検証する。加えて、名詞句用法標識 *-i* の起源についても考察する。最後に指示代名詞に用いられる *kes* を検討する。

5.1 用言基盤準体言

次に挙げる例は、新羅時代の吏讀資料『新羅華嚴經寫經造成記』（8 世紀）と吏讀⁸⁾で書かれた行政文書『新羅帳籍』（8 世紀）からのものである。南（2000）に基づいて、吏讀文（吏讀で書かれた文章）とその解説（必要箇所のみ）を併記しておく。（注釈は本稿筆者、以下同様。）

古代韓国語（8 世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

(16) a. 合桑千四以三年間中加植内九十... 『新羅帳籍』

haphAye spongnamAk te sim-un ahun... (モノ準体言)

合わせて 桑の木 もっと 植える-PRF.NMLZR 九十

「合算すると桑の木千四本、以って、三年間で加えて植えたのが九十本…」

(南 2000: 260)

b. 前内視令節植内是而（死白 栢子木十三）『新羅帳籍』

cen naysilyeng ttay sim-un-i-ciman (モノ準体言)

前 内視令 時 植える-PRF.NMLZR-COP-が

「この前の内視令の時に植えたものだが（枯れたのを報告する、栢子木十三本）」

(南 2000: 268)

7) 中世韓国語コーパス資料には、「韓国国立国語韓国語史コーパス」を大元としてソウル大学の朴鎮浩教授によって補充・再構築された UniConc を使用した。

8) 漢字の音と訓を借りて当時の音声言語を表した表記法。

<用言基盤準体言・修飾用法>

- (17) a. 淳淨~~為~~内新淨衣禪水衣...等 『新羅華嚴經寫經造成記』

swunceng **hA-n** sincenguy kwunswuuy... tAl (モノ準体言)
 淳淨 する-PRF.NMLZR 新淨衣 禪水衣 など
 「淳淨たる新淨衣、禪水衣... など」 (南 2000: 222)

- b. 經之成内法者 『新羅華嚴經寫經造成記』

kyeng-uy **ilwu-n** pep-un (モノ準体言)
 經-NMLZR 成す-PRF.NMLZR 法-TOP
 「經の成した法は」 (南 2000: 237)

(16) は用言基盤準体言の名詞句用法、(17) は修飾用法である。名詞句用法も修飾用法も体言化辞 *-n* のみ現れ、名詞句用法標識 *kes* は見られない。つまり、ここでは *kes* のない準体言の名詞句用法——[[[VP]-**n**]_{NMLZ}]_{NP}——を作り、修飾用法でも [[VP]-**n**]_{NMLZ} となり、二つは同じ形を取るのである。また名詞句用法・修飾用法ともに実体概念モノを表す準体言を作るが（以下参照）、名詞句用法になると、さらにそれぞれの文脈により、指示対象の「桑の木」と「栢子木」（五葉松）を指し示することができる。このように名詞句用法標識 *kes* がなくても名詞句用法を作ることができる。

ここで上述した名詞句用法と修飾用法がともに実体概念モノを表すということについて、若干説明を加える。例えば、「[昨年植えた]_{NMLZ} のは桑の木だ」は準体言（NMLZ）の名詞句用法、「[昨年植えた]_{NMLZ} 桑の木」は準体言（NMLZ）の修飾用法であるが、Shibatani の体言化理論によると、修飾用法の準体言も名詞句用法のそれと同じように、それが概念表示（denote）するのは「昨年植えたモノ」（集合）となる。つまり、修飾用法では「昨年植えたモノ」（集合）と主名詞「桑の木」（集合）の部分集合によって値が決まり適切な解釈が得られることになる。言い換えると、修飾用法の準体言が表す概念表示により、主名詞の概念表示が限定される（詳細は Shibatani 2018: 370, 2019: 84 と鄭 2021b 参照）。

古代韓国語が示す重要な点は、モノの意味は *kes* によって表されるとした従来の見方と異なり（2 節参照）、*kes* がなくてもモノ準体言を作ることができることである。本稿では、ヒト準体言、モノ準体言、コト準体言という用語を用いるが、これは準体言が作られたときに解釈されるヒト・モノ・コトの意味表示に焦点を置いたものである。

名詞句用法において体言化辞の後に *kes* が現れないのは、13 世紀の文献資料や中世韓国語（15-16 世紀）のハングル資料にも見られる。下記の古代韓国語（13 世紀）の例は、釈讀口訣（高麗時代の表記法の一つ）で書かれたもので、原文（漢文）を釋讀口訣で表記したものである（張他 2015）。「瑜伽」は『瑜伽師地論』である。（19）は中世韓国語（15-16 世紀）

の例である。

古代韓国語（13 世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

- (18) …一切境-*akuy* 得-*kom* 障導 無-*si-n-ul*
 一切の境界-LOC 必ず-強調 障碍 ない-HON-PRS.NMLZR-ACC
 (値) 遇-*hA-l-ti-ta* (ヒト準体言)
 遇う-する-FUT.NMLZR-NPM-IND
 「一切の境界で必ずや障害のない方（大師）に出会うことであろう」
 [瑜伽 02: 21-23] (張他 2015: 111)

中世韓国語（15-16 世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

- (19) a. *kAAmyelom-un motA-n-uy wenmang-i-n-i.* (ヒト準体言)
 豊かさ-TOP 集まる-PRF.NMLZR-NMLZR 願望-COP-NMLZR-NPM
 「豊かさはすべての人の願望であり」(富者衆之怨也) [小學諺解 6: 83b] 1588
 b. *kutuy-s ho-n cocho hAya* (コト準体言)
 あなた-NMLZR する-PRF.NMLZR (-ACC) 追う して
 「あなたの行なったのを追従して行ない」 [釋譜詳節 6: 8b] 1447
 (中世韓国語コーパス資料)

上記の例は用言基盤準体言の名詞句用法であるが、8 世紀の例 (16) 同様、いかなる名詞句用法標識 (*kes* または *-i*) も現れず、体言化辞だけで成立する [[VP]-*n*]_{NMLZR}NP の構造となっている。意味的にはヒトを表す準体言のみならず、コトを表す準体言もある。(18) は文脈により「大師」を指す。

以上から、中世韓国語までは *kes* がなくても（体言化辞 *-n* だけでも）体言化された構造、すなわち準体言を作り、ヒト・モノ・コトを意味表示できることが確認できた。

名詞句用法標識 *kes* の歴史的発達

歴史的に、名詞句用法標識 *kes* がどのように現れたかを考察する前に、名詞句用法標識 *-i* の存在を先に述べる必要がある。下記の中世韓国語の例に見られるように、*-i* も体言化辞 *-n* の後に現れ、名詞句用法標識として用いられる。つまり、現代韓国語の *kes* と同位置に現れ、体言化辞とともに準体言の名詞句用法を作るのである。

中世韓国語（15-16 世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

- (20) a. *pal mulu kou-n-i-wa sAyngsyen pti-n-i-wa...*
 足 柔らかい 煮る-PRF.NMLZR-NPM-と 魚 蒸す-PRF.NMLZR-NPM-と
sAykoki kwuu-n-i-wa... (モノ準体言)
 牛肉 焼く-PRF.NMLZR-NPM-と
 「(豚) 足を柔らかく煮たのと、魚蒸したのと、牛肉焼いたのと…」
 『翻訳朴通事』 1510 頃 (張 2008: 22)
- b. *wuli hAn phan twuwu-e ci-n-i ikuy-n-i*
 私達 一局 置く-CONJ 負ける-PRF.NMLZR-NPM 勝つ-PRF.NMLZR-NPM
naki ho-tAy este-hA-n-y-o? (ヒト準体言)
 賭け する-ことが どう-する-PRS.NMLZR-NPM-INT
 「私たち(碁を)一局打って、勝った人、負けた人の勝敗を分けてみるのはどうだ
 い？」
 『翻訳朴通事』 1510 頃 (張 2008: 52)
- c. *con-un is-nA-n-i-o mang-un eps-un-i-la.* (コト準体言)
 存-TOP いる-PRS-NMLZR-NPM-and 亡-TOP いない-PRS-NMLZR-NPM-IND
 「存とはいることであり、亡とはいわないことである」
 [月印釋譜 21: 54b] 1459 (中世韓国語コーパス資料)

(20a) の *kou-n-i* は [[[*kou*]_{VP} -*n*]_{NMLZ} -*i* _{NPM}]_{NP} (-*wa*) (煮たの(と)) のような構造でモノ準体言を、(20b) の *ci-n-i* は [[[*ci*]_{VP} -*n*]_{NMLZ} -*i* _{NPM}]_{NP} (負けた人) の構造でヒト準体言を、(20c) の *is-nA-n-i* は [[[*is-nA*]_{VP} -*n*]_{NMLZ} -*i* _{NPM}]_{NP} (-*o*) (いること(であり)) の構造でコト準体言をそれぞれ表す。現代語では、(20b) のように準体言がヒトを表す場合にのみ -*i* が残り、モノ・コトを表す準体言は *koun-kes*, *iss-nun-kes* のように *kes* に交代している ((41) 参照)。このことから、(20a) と (20c) は現代語では理解困難か不自然な表現となる。

つまり、-*i* は *kes* と同じように名詞句用法標識であり、ヒトを表す場合以外は、-*i* から *kes* へと歴史的な変化があったと見られる。

ところが、中世韓国語にも名詞句用法標識 *kes* が用いられている例が確認できる。(21a) は *kes* を用いたモノ準体言、(21b) はコト準体言の例である。

中世韓国語（15-16 世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

- (21) a. *i tongsan-un Swutal-i sa-n kes-i-o* (モノ準体言)
 この 東山-TOP 名前-NOM 買う-PRF.NMLZR NPM-COP-and
 「この東山は須達が買ったのであり」 [釋譜詳節 6: 40a] 1447
- b. *nwuy ho-n kes-i-ls-ko* (コト準体言)
 誰 .NOM する-PRF.NMLZR NPM-COP-POL-INT
 「誰がしたことなのですか」 [釋譜詳節 11: 27b] 1447
 (中世韓国語コーパス資料)

そこで、歴史コーパス資料 UniConc を用いて、体言化辞 *-n* の後にくる *-i* と *kes* の使用件数の推移を各世紀ごとに調べてみた⁹⁾。検索語は動詞 *hA-* (する) を用いた。結果は <表 1> の通りである。数値はヒット件数を表す。注目すべきは、15-16 世紀の *-i* と *kes* の使用件数はほぼ変わらないことである。しかし、17 世紀をピークに、19 世紀から 20 世紀初頭にかけては、*-i* の使用件数が格段に減少する半面、*kes* の使用件数は劇的に増えている。つまり、このような歴史的な相補の関係は、名詞句用法標識が、*-i* から *kes* へ歴史的に交代したことをサポートするものと考えられる。また準体言がヒトを表す場合は、名詞句用法標識 *-i* と文体の差はあるが、いわゆる形式名詞 *ca* (者)、*pwun* (方) などを用いた表現も可能である¹⁰⁾。しかし、名詞句用法標識 *-i* の代わりに名詞 *salam* (人) が用いられると、明らかに修飾用法と判断される。<表 1> を参照されたい。

<表 1> 動詞 *hA-* から見た名詞句用法標識 *-i* と *kes* の歴史的推移

検索項目	15C	16C	17C	18C	19C	20C 初
<i>hA-nA-n-i-lAl(/lul)</i> する-PRS-NMLZR-NPM-ACC	6	8	31	16	1	3
<i>hA-nA-n kes-Al(/hA-nun kes-ul)</i> する-PRS-NMLZR NPM-ACC	7	8	15	23	212	154
<i>hA-nA-n ca (/n-un)</i> する-PRS-NMLZR 者 (/TOP)	0	2	1	5	48	21
<i>hA-(si-)nA-n pwun (/un)</i> する-(HON-)PRE-NMLZR 方 (/TOP)	0(2)	0	5	4	3(1)	5
Cf. <i>hA-nA-n salAm (/un)</i> する-PRS-NMLZR 人 (/TOP)	12	28	39	191	869	561

<表 1> の状況と合わせて、歴史的変化に伴う体言化辞 *-n* の分布を UniConc に基づいて調

9) 各世紀のデータは、量的に均質なものではないことを予め理解しておく必要がある。

10) これらの形式は *kes* と同様に単独では用いることができず、**ceki, {i/ca/pwun}-i o-n-ta*。(あそこに、|ヒト/者/方| がくる) とは言えない。本稿では、*ca* や *pwun* も *-i, kes* 同様、名詞の一種ではなく、*-i* との文体の差を表すための、名詞句用法標識であると見なす。

査し、その結果を大まかにスケッチしてみると、次のようである¹¹⁾。<表2>の中の記号(*)は文献上現れないことを表す。

<表2> 歴史的変化に伴う名詞句用法と修飾用法の区別

	新羅 (吏讀) 高麗 (口訣)	15C	16C-17C	18C-20C 初	現代韓国語
名詞句用法 (ヒト・モノ・コト準体言)	-n (-n tA) Unexamined	-n -n-i -n kes *-n ca -n pwun	-n -n-i -n kes -n ca -n pwun	*-n -n-i (-n i) -n kes -n ca -n pwun	*-n -n i -n kes -n ca -n pwun ヒト (擬古的) モノ・コト ヒト (者) ヒト (方)
修飾用法	-n	-n	-n	-n	-n

<表2> が表す状況は、大きく次のようにまとめることができる。

- (22) (i) 体言化辞 -n は、名詞句用法と修飾用法を互いに区別 (distinguish) する方向に向かって拡張し、名詞句用法にのみ -i と kes が現れる。その結果、現代韓国語では、名詞句用法の場合名詞句用法標識が必ず用いられるようになった。
- (ii) 中世韓国語とそれ以前の韓国語では、-n, -n-i (による準体言) がヒト・モノ・コトをすべて指すことができ、適用範囲が広がった。しかし、現代韓国語になると、モノ・コト (を表す準体言) は -n kes へ、ヒト (を表す準体言) は -n-i (とその他) へと分化していく。

以上から、kes をめぐる次の二つの疑問に対してその答えを与えることができる。一つ目は、現代韓国語では、なぜ体言化辞の後に必ず kes がくるのか。その答えは、(22) の (i) を見られたい。次に、二つ目の問いは、kes はどのような過程を経て現代語のような名詞句用法標識として発達してきたのだろうかという点である。これは以下のように説明できる。

- (23) 名詞句用法標識の現れとその歴史的展開

$$\emptyset \rightarrow \begin{cases} kes \rightarrow kes \\ -i \rightarrow kes \end{cases}$$

(23) の $\emptyset$ は、後続する名詞句用法標識がない、すなわち体言化辞だけで準体言を作る「VP-NMLZR」の構造であることを表す。(23) に基づくと、準体言が名詞句用法の場合、「VP-

11) 正確な調査は今後の研究に委ねたい。

現代韓国語

<体言基盤準体言・名詞句用法>

- (25) a. *atul sey-s motwuta Sewultay-ey tuleka-ss-ta.* (ヒト準体言)

息子 三-NMLZR すべて ソウル大-LOC 入る-PST-IND

「三人の息子が全員ソウル大学に入った。」

- b. *atul sey-s-i hankkepeney Sewultay-ey tuleka-ss-ta.* (ヒト準体言)

息子 三-NMLZR-NPM 一度に ソウル大-LOC 入る-PST-IND

「三人の息子が一度にソウル大学に入った。」

前節の(24)によると、現代韓国語では、準体言がモノを指す場合は名詞句用法標識 *-i* を用いないことが予測される。実際、(26) で見るようにこの予測は正しい。体言化辞 *-s* による「NUMBER-*s*」はヒト・モノ両方とも許されるが、「NUMBER-*s-i*」は(26b)のように、モノの場合は不適切であることがわかる¹³⁾。

- (26) a. *nay yenphil-i sey-s ta epseci-ess-ta.*

私の 鉛筆-NOM 三-NMLZR すべて 消える-PST-IND

「鉛筆が三つとも全部なくなった。」

- b. *??nay yenphil-i sey-s-i ta epseci-ess-ta.*

私の 鉛筆-NOM 三-NMLZR-NPM すべて 消える-PST-IND

「鉛筆が三つとも全部なくなった。」

修飾用法の場合も、用言基盤体言化同様、体言化辞の後には名詞句用法標識が現れず、体言化辞 *-s* のみ用いられる。(数詞の修飾用法に関する詳細は鄭 2021b 参照。)

<体言基盤準体言・修飾用法>

- (27) a. *pi-s soli*

雨-NMLZR 音 「雨の音」

- b. *namwu-s ip*

木-NMLZR 葉 「木の葉」

13) 数準体言に用いられる名詞句用法標識 *-i* については、これを主格と見る立場もありうるが、もし主格であれば、ヒトを表す場合にのみ *-i* を付けられることについて説明が困難である。また *-i* が、すでにヒトを表す自立語の数準体言 *seys* の後に付くことから、これを依存名詞ないし形式名詞として見なすことにも無理がある。

c. *wuy-s mau*

上-NMLZR 村 「上の村」

d. *tases namca*

五.NMLZR 男 「五人の男」

体言化辞 -s の歴史的発達 (I)

次に挙げる数準体言は、現代語では体言化辞 -s が付いた「NUMBER-s」の形で指示対象のヒトやモノの数え上げに用いられるが、中世語では -s ではなく、-h が用いられた。つまり、歴史的に -h から -s への変化が見られるわけである¹⁴⁾。

<表 3> 数準体言における -h > -s への歴史的変化

	中世韓国語 (15C)	現代韓国語
three 「三つ」	<i>seyh</i>	<i>seys</i>
four 「四つ」	<i>neyh</i>	<i>neys</i>
several 「多数」(7～8)	<i>yeleh</i>	<i>yeles</i>

-h から -s への歴史的変化は、実は、数準体言だけに限らず、中世韓国語の普通名詞にも見られる。(28) のように、*am* (雌)・*swu* (雄) と、それに -h の付いた *am-h* (雌であるモノ)・*swu-h* (雄であるモノ) があるが、それぞれ「NOUN」と「NOUN-h」とすると、前者は属性・性質としての「雌性」(feminine)・「雄性」(masculine)を表すが、後者は「雌性が関係するヒト・モノ」(female)・「雄性が関係するヒト・モノ」(male)を表し、さらに文脈によって「雌・雄であるモノ」から「雌・雄 (の動物)」を指すことになる。

中世韓国語 (15 世紀)

<体言基盤準体言・名詞句用法>

(28) *am-h-i swu-h-ul cos-nos-ta.* (モノ準体言)

雌性-NMLZR-NOM 雄性-NMLZR-ACC 追いかけている

「雌 (であるモノ) が雄 (であるモノ) を追いかけている」

[初刊本杜詩諺解 17: 5] 1481 (中世韓国語コーパス資料)

また「NOUN-h」は、名詞句用法の場合、現代語では名詞句用法標識 *kes* が用いられ、「NOUN-h-kes」になる。その場合、次のように *am-h-kes* > *am-khes* になり、激音化する。つ

14) 中世語数詞の中には、*hAna-h* (一つ)、*twul-h* (二つ)、*yel-h* (とお) のように、現代語では -h が落ちて、*hana*、*twul*、*yel* のようになるものもある。詳細は鄭 (2021b) を参照。

まり、体言化辞 *-h* にさらに *kes* が加わるという、*-h* > *-h kes* への変化が認められる。

現代韓国語

<体言基盤準体言・名詞句用法>

- (29) *am-khes* (← *am-h-kes*)-i *swu-khes* (← *swu-h-kes*)-ul *ccoch-nun-ta*. (モノ準体言)

雌性-NMLZR.NPM-NOM 雄性-NMLZR.NPM-ACC 追いかける-PRS-IND

「雌(であるモノ)が雄(であるモノ)を追いかけている」

ではなぜ、*-h* から *-s* への変化が起こらず、現代韓国語においても *-h* がそのまま残っているかであるが、そこには、後続する語が有気音の *kes* であるという、音声上の理由が考えられる。実際、修飾用法をみると、有気音の前では *-h* が残り、それ以外の環境では *-s* になる。つまり、下記で見るように、古形の体言化辞 *-h* が音韻環境に支えられた形で残ることによって、現代語では古形の *-h* と、*-h* から取って代わった新形の *-s* とが併存していることがわかる。

<体言基盤準体言・修飾用法>

- (30) a. *swu-h-kay* → *swu-khay* 「雄の犬」
 b. *swu-h-koyangi* → *swu-khoyangi* 「雄の猫」
 c. *swu-h-talk* → *swu-thalk* 「雄の鶏」
- (31) a. *swu-s-mal* 「雄の馬」
 b. *swu-s-so* 「雄の牛」
 c. *swu-s-sasum* 「雄の鹿」

またこの *-s* は、歴史的に必ず体言 (NUMBER、NOUN) のみに付く体言化辞であったかという、必ずしもそうでもない証拠もわずかながら残っている。(32) は中世韓国語 (15 世紀) の例であるが、動詞の後に体言化辞 *-s* が現れ、名詞句用法として用いられている¹⁵⁾。しかも、こちらの体言化辞 *-s* の後には名詞句用法標識 *kes* が現れていない。しかし一方では、(33) のように体言基盤準体言にも体言化辞 *-s* が用いられ、ここでは *-s* の後に名詞句用法標識 *kes* が用いられている。この状況は (34) の現代韓国語にも見られる¹⁶⁾。つまり、名詞句用法において、*-s* > *-s kes* への発達が認められる。

15) これを見ると、体言化辞 *-s* は、古くは用言基盤準体言と体言基盤準体言の両方に用いられた可能性がある。

16) 現代韓国語では子音の後の *-s* は表記しないため、現代語の表記法と必ず一致するものではない。*-s* の存在は *kes* の濃音化現象によって確認できる (鄭 2021b 参照)。

中世韓国語（15世紀）

<用言基盤準体言・名詞句用法>

- (32) a.
- nol-As (-Al culye)*
- 【釋譜詳節 6: 10b] 1447

遊ぶ-NMLZR (-ACC 楽しんで)

「いたずら（を楽しんで）」

- b.
- pAyh-As (-i isilssAy)*
- 【釋譜詳節 11: 6a] 1447

習う-NMLZR (-NOM あるので)

「癖（があるので）」

<体言基盤準体言・名詞句用法>

- (33) a.
- phwunglyu-s-kas (-i-la)*
- 【法華經序 23a] 1463

音楽-NMLZR-NPM (-COP-IND)

「楽器（である）」

- b.
- kwuy-s-kes (-tAlh-i)*
- 【釋譜詳節 21: 4b] 1447

鬼-NMLZR-NPM (-PL-NOM)

「鬼の類（たちが）」

(以上、中世韓国語コーパス資料)

現代韓国語

<体言基盤準体言・名詞句用法>

- (34) a.
- kong-s-kes*

空-NMLZR-NPM 「無料の物」

- b.
- he-s-kes*

虚-NMLZR-NPM 「虚構の物」

- c.
- alay-s-kes*

下-NMLZR-NPM 「下の者」

体言化辞 -s の歴史的発達（Ⅱ）

中世韓国語の体言化辞 -s（いわゆる属格；安 1968、安・李 1990）には、現代語ではその用法が消えているものもある。現代韓国語になると、次のように -s から -uy に交代しているものであるが、それは主として人の所有概念を表す場合の修飾用法において見られる。<表 4> の -k, -p, -H は -s の変異形（異表記）である。

< 表 4> 修飾用法に見られる -s > -uy への歴史的変化

日本語	中世韓国語（15C）	現代韓国語
世尊の言葉	<i>seycon-s mal</i>	<i>seycon-uy mal</i>
仏陀の道理	<i>pwutye-s toli</i>	<i>pwuche-uy toli</i>
如来の体に	<i>yelay-s mom-ay</i>	<i>yelay-uy mom-ey</i>
一生の志	<i>phyengsayng-k ptut</i>	<i>phyengsayng-uy ttus</i>
人の意志	<i>salAm-p ptut</i>	<i>salam-uy ttus</i>
先考の遺志	<i>senko-H ptut</i>	<i>senko-uy ttus</i>

ちなみに、上記の例は日本語の体言化辞「の」（いわゆる属格）に対応するが、古典日本語になると、古形の体言化辞「つ」があり、これも体言化辞 -s と同じように、修飾用法の「沖つ白波」、「まつげ」とともに、数準体言の名詞句用法「三つ」、「四つ」がある（詳細は鄭 2021b 参照）。< 表 5> を参照されたい。

< 表 5> 韓国語の -s に対応する日本語「つ」・「の」

	韓国語	日本語
名詞句用法	<i>seys</i>	三つ
	<i>neys</i>	四つ
修飾用法	<i>nwun-s-sep</i>	まつ毛（目つ毛）
	<i>nwun-ey-s kasi</i>	目の棘
	<i>namwu-s ip</i>	木の葉
	<i>wuy-s maul</i>	上の村
	<i>pi-s soli</i>	雨の音

韓国語における体言基盤の体言化辞と名詞句用法標識の関係について、これまで述べた内容を整理すると、次のようである。

(i) 体言化辞 -s と -uy が単独で現れる場合（名詞句用法標識を用いない場合）、-s は名詞句用法と修飾用法の両方に用いられるが、-uy は修飾用法にのみ用いられる。また体言化辞 -s は -h から -s への歴史的発達が認められる。

(ii) 体言化辞の後に名詞句用法標識 -i や *kes* が加わる場合は、-s-i, -s-kes, -uy-kes の三つの組み合わせがあり¹⁷⁾、三つとも名詞句用法にのみ用いられる。また歴史的に見ると、-s > -s-kes への展開が認められる。

17) この三つ以外に、-uy-i（体言化辞 + 名詞句用法標識）の組み合わせはなぜないのか、という問題がある。単なる音上の理由なのか、それとも -uy と -i が機能的には元来同じものであったため（体言化辞 -i については次節参照）、音声的に -uy または -i のどちらかに統合してしまったからなのか（この場合、修飾用法には -uy が、名詞句用法には -i が用いられたことも考えられる）、あるいは他の歴史的理（特に名詞句用法標識 -i から *kes* への展開）があったからなのかなどについては、今のところ不明である。黄（1997）には示唆に富む観察があり、参照されたい。

「豊かさはすべての人の願望であり」（富者衆之怨也） [小學諺解 6: 83b] 1588

- b. *cinsillo haynghA-l-Ay* *phyenuy-lAl* *puth-ul-ssAy*
 真実に 行う-FUT.NMLZR-NMLZR 便宜-ACC 従う-FUT.NMLZR-ことで
 「本当に行う人の便宜に従うことで」 [禪宗永嘉集下 31a] 1464
 （中世韓国語コーパス資料）

- (36) a. *wuli hAn phan twuwu-e ci-n-i* *ikuy-n-i* (= (20b))
 私達 一局 置く-CONJ 負ける-PRF.NMLZR-NPM 勝つ-PRF.NMLZR-NPM
naki ho-tAy este-hA-n-y-o?
 賭け する-ことが どう-する-PRS.NMLZR-NPM-INT
 「私たち（碁を）一局打って、勝った人、負けた人の勝敗を分けてみるのはどうだい？」
 『翻訳朴通事』 1510 頃（張 2008: 52）

- b. *nolay pulu-l-i-lan* *pull-e alpph-uy naSa-o-la hAya*
 歌 歌う-FUT.NMLZR-NPM-とは 呼んで 前-LOC 出てくる-IMP して
 「歌を歌う人は、呼んで前に出てこい、といい」
 『翻訳朴通事』 1510 頃（張 2008: 24）

この歴史的変化を理解するポイントは、名詞句用法標識 *-i* が付くためには、前の要素が名詞に準ずるもの、すなわち準体言でなければならない、という条件が要求される点にある。名詞句用法標識 *-i* が、体言化辞 *-n*, *-l* が付いた準体言の後に付くのもそのためである。この点は、名詞の後に付く上記の体言化辞 *-i* と共通している。つまり、このことは、名詞句用法標識 *-i* がなぜ体言基盤の体言化辞 *-i* と同様にふるまうかについて、説明を与えられるものとして考えられる。要するに、*-i* が付かないものも、*-i* が付いたものも文法的地位は変わらず、それぞれ名詞（体言化辞の場合）と準体言（名詞句用法標識の場合）のままでありうる。ただし、*-i* が付く場合は、当該の名詞・準体言が指し示す指示対象がより具体化され明確になるという意味的效果が生まれる。このことが、文法的地位を変えず、意味の明瞭化へと変化していくこの現象の本質であり、*-i* が付かないもの（名詞・準体言）から *-i* の付くもの（名詞・準体言）へと歴史的発達を促した動因ではないかと考えられる。

つまり、この二つの並行した現象はそれぞれレベルは異なるものの、同一環境で起こっている。我々は、名詞句用法標識 *-i* は体言基盤の体言化辞 *-i* がその起源であり、名詞に付く体言化辞 *-i* から用言基盤準体言にシフトして名詞句用法標識 *-i* として転用されたものと考ええるわけである¹⁸⁾。体言化辞から名詞句用法標識への転用は他言語にもよく見られる現象で

18) 同様の現象として、韓国語の体言基盤の体言化辞 *-s*（いわゆる属格）から名詞句用法標識 *-s* への転用も見られる。これについては鄭（2020）を参照されたい。

ある (Shibatani 2013, 2017 など) 19). 20)。

若干補足すると、中世語では<表 6>の動物名詞だけでなく、有情物名詞の多く、特に *ap-i* (父)、*em-i* (母)、*halm-i* (祖母)、*olap-i* (兄)、*myenul-i* (嫁) などの親族名詞類などにも、体言化辞 *-i* が付く方向に変化している (黄 1997)。また *tolas* (桔梗) > *tolac-i* (桔梗) のように、非情物名詞にも体言化辞 *-i* が付く場合もある。さらに、用言に付く体言化辞 *-i* もある。*kil-i* (長い -NMLZR)、*noph-i* (高い -NMLZR) のように、用言 (主に形容詞) に付

19) 例えば、古典日本語の「人妻とわがのと…」(好忠集 10 世紀)の「がの」は、体言化辞 (いわゆる属格)の「が」と名詞句用法標識「の」の組み合わせであるが、この「が」(体言化辞)が、高知県中土佐方言では「太郎の~~が~~を見せて」や「こわれた~~が~~を捨てた」のように (柴谷 2014, Shibatani 2013, 2017)、名詞句用法標識 (いわゆる準体助詞)として用いられている。

20) その一方で、Shibatani (2018: 403, 2019: 129) では、名詞句用法標識がさらに体言化辞へと拡張していくことに付いても、通言語的データに基づいた「名詞句用法標識の拡散の方向」(Directions of spread of nominalization markers) 仮説を提案している。この仮説が含意するところは大きく三つある。一つ目は、拡散の中心にあるのは体言基盤体言化の名詞句用法であり、拡散の出発点となる。韓国語に代入して説明すると、以下の I、II、III のようになる。II と III の記号 “?” は、話しことばでは許される可能性があり (括弧の中の *nay-kke* は話しことば)、実際の大人の発話や幼児語でも使われていることが観察されたりするが、規範的な言い方では非文もしくは言い間違いとして判断されることを表す。この仮説によると、II と III の *kes* もいずれかは矢印の方向への拡散が起こることが予測される。またこの拡散がすべて完成すると、*kes* は名詞句用法標識ではなくなり、体言化辞として機能するものとなる。韓国語の場合、I 段階の a から b への拡散 (同一用法の場合) は順調に進んでいるが、II と III 段階の a から b への拡散 (名詞句用法から修飾用法へ) はまだ不自然であると言える。つまり、現段階では *kes* の体言化辞への拡張には至っていないが、将来的にはその可能性がある。二つ目は、このように拡散した結果、体言化にはいくつもの体言化辞が重複して用いられることが含意される (Shibatani and Shigeno (2013) の奄美琉球方言の状況を参照)。II と III の b のように、修飾用法では体言化辞の重複が許されることとなる。三つ目は、*kes* が完全に体言化辞として定着すると、名詞句用法には、修飾用法との区別を図るためにさらなる標識が必要となり、新たな名詞句用法標識が現れることが含意される (本文の (22) 参照)。以上によると、日本語の「赤い花」のような誤用表現が、なぜどの言語の話者であっても第二言語習得においてよく起こるのかについて、理論的な説明が可能となることもわかる (柴谷 2014, 柴谷・鄭 2019)。

I 体言基盤体言化の名詞句用法 (a) から用言基盤体言化の名詞句用法 (b) へ

- | | |
|--|-----------------|
| a. <i>nay</i> <i>kes</i>
僕 .NMLZR NPM 「僕の」 | 【体言基盤体言化・名詞句用法】 |
| | ↓ |
| b. <i>nay-ka sa-n</i> <i>kes</i>
僕-が 買う-PRF.NMLZR NPM 「僕が買ったの」 | 【用言基盤体言化・名詞句用法】 |

II 体言基盤体言化：名詞句用法 (a) から修飾用法 (b) へ

- | | |
|--|-----------------|
| a. <i>nay</i> <i>kes</i> (→ <i>nay-kke</i>)
僕 .NMLZR NPM (lit. 「僕のの」) 「僕の」 | 【体言基盤体言化・名詞句用法】 |
| | ↓ |
| b. ? <i>nay</i> <i>kes</i> <i>chayk</i> (→ <i>nay-kke chayk</i>)
僕 .NMLZR NMLZR 本 (lit. 「僕のの本」) 「僕の本」 | 【体言基盤体言化・修飾用法】 |

III 用言基盤体言化：名詞句用法 (a) から修飾用法 (b) へ

- | | |
|--|-----------------|
| a. <i>nay-ka sa-n</i> <i>ke(s)</i>
僕-が 買う-PRF.NMLZR NPM 「僕が買ったの」 | 【用言基盤体言化・名詞句用法】 |
| | ↓ |
| b. ? <i>nay-ka sa-n</i> <i>ke(s)</i> <i>chayk</i>
僕-NOM 買う-PRF.NMLZR NMLZR 本 (lit. 「僕が買ったの本」) 「僕が買った本」 | 【用言基盤体言化・修飾用法】 |

いて「長さ」、「高さ」の意味を表す名詞句用法に用いられる一方、その後に動詞がくると、副詞的用法に転じる²¹⁾。現代韓国語にも *ttek-pokk-i* (餅 - 炒める -NMLZR, 「トッポッキ」)、*mek-i* (食べる -NMLZR, 「餌」)、*kwu-i* (焼く -NMLZR, 「(魚) 焼き」) のように用言に付く体言化辞 *-i* だけでなく、*ttwungttwung-i* (でぶ) などオノマトペに付く体言化辞 *-i* も多くあり、なお生産的である。

今度は、文法レベルで作られた準体言が語彙化している例を取り上げてみる。(37) は、中世語では準体言 $[[[elwu(-si)]_{VP} -n]_{NMLZ}]_{NP}$ が「結婚したヒト」・「結婚された方」に相当する意味であったと考えられるが、現代語では「大人」・「(他人の) お父上」(年配の人を敬って言う) として語彙化しており、現代の母語話者にはその内部構造を分析できなくなっている。さらに (38) のように、現代韓国語では体言化辞 *-n* の後に名詞句用法標識 *-i* が付くものも現れ²²⁾、単一語 (名詞) として認識されるものまでである。この場合の *-i* は、構成上は用言基盤の体言化辞 *-n* の後に名詞句用法標識 *-i* が付くという文法レベルでの手続きを取っているが、母語話者の認識では、(上記の動物名のように) 体言化辞 *-i* と同レベルのものとして理解されている可能性がある。現代語において、名詞用法標識 *-i* はその使用範囲が狭くなり、ヒト以外は用いられなくなっていることは、5.1 節で述べたとおりである。しかし、(39) のように、ヒトでも *-i* を *kes* に置き換えられる。この場合は人を物扱いすることから人を見下すような表現となり、差別語になりやすい。

- | | | | |
|------|---------------------|---|---------------|
| (37) | 中世韓国語 (15 世紀) | | 現代韓国語 |
| a. | <i>elwu-n</i> | > | <i>elun</i> |
| | 結婚する -PRF.NMLZR | | 「大人」 |
| b. | <i>elwu-si-n</i> | > | <i>elusin</i> |
| | 結婚する -HON-PRF.NMLZR | | 「(他人の) お父上」 |

- (38) 現代韓国語
- | | |
|----|------------------------|
| a. | <i>eli-n-i</i> |
| | 幼い -PRF.NMLZR-NPM 「子供」 |
| b. | <i>celm-un-i</i> |
| | 若い -PST.NMLZR-NPM 「若者」 |

21) 例えば、*ce san-uy noph-i(-nun)* (あの山の高さ (は)) (名詞句用法) と *hanul noph-i nalala* (空高く飛べ) (副詞的用法) がある。準体言の副詞的用法 (adverbial use) については Shibatani (2019) を参照。

22) 実は、中世韓国語の *elwu-si-n* ((他人の) お父上) にも *-i* が付いた *elwu-si-n-i* ((他人の) お父上) があったが (南 1971/1994: 360 参照)、現代語ではなくなっている。

c. *nulk-un-i*

老いる -PST.NMLZR-NPM 「年寄り」

cf. *salangha-nu-n-i*

愛する -PRS-NMLZR-NPM 「愛する人」

(39) 現代韓国語

a. *eli-n-kes*

幼い -PST.NMLZR-NPM 「幼い子」

b. *celm-un-kes*

若い -PST.NMLZR-NPM 「若いやつ」

c. *nulk-un-kes*

老いる -PST.NMLZR-NPM 「老いぼれ」

cf. *salangha-nu-n-kes*

愛する -PRS-NMLZR-NPM 「愛する物・事」

一方、語彙化しない場合の名詞句用法標識の *-i* と *kes* の関係は、5.1 節で見たように、準体言がヒトを表さない場合、名詞句用法標識 *-i* (中世韓国語) が名詞用法標識 *kes* (現代韓国語) へと交代するのである。

中世韓国語 (16 世紀)

(40) *pal mulu kou-n-i-wa sAyngsyen pti-n-i-wa...*

足 柔らかい 煮る -PRF.NMLZR-NPM- と 魚 蒸す -PRF.NMLZR-NPM- と

sAykoki kwuu-n-i-wa... (= (20a))

牛肉 焼く -PRF.NMLZR-NPM- と

「(豚) 足を柔らかく煮たのと、魚蒸したのと、牛肉焼いたのと…」

『翻訳朴通事』1510 頃 (張 2008: 22)

現代韓国語

(41) *cokpal pwutulepkey kou-n-kes-kwa sayngsen cci-n-kes-kwa...*

豚足 柔らかく 煮る -PRF.NMLZR-NPM- と 魚 蒸す -PRF.NMLZR-NPM- と

sokoki kwuwu-**n-kes**-kwa...

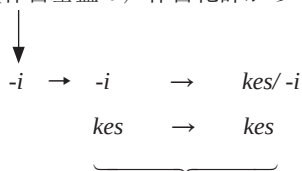
牛肉 焼く-PRF.NMLZR-NPM-と

「豚足を柔らかく煮たのと、魚蒸したのと、牛肉焼いたのと…」

以上をまとめると、(i) 中世韓国語には、体言基盤の体言化辞 *-i* があった。(ii) 名詞句用法標識 *-i* は、この体言基盤の体言化辞 *-i* からの転用であると考えられる。(iii) 現代韓国語の準体言の名詞句用法標識 *-i* は、ヒトの場合を除いて、*kes* に交代している。ただし、語彙化した *-i* に対応する卑下の *kes* や子供に用いる *kes* などはこの限りではない。これを (23) の提案と合わせて図式化すると、次のようになる。

(42) 名詞句用法標識の歴史的展開

(体言基盤の) 体言化辞から



(準体言の) 名詞句用法標識へ

5.4 指示代名詞と名詞句用法標識 *kes*

最後に、指示代名詞と名詞句用法標識 *kes* の関係について考察する。

現代韓国語では、指示代名詞がモノを指す場合はその後に *kes* が付いて、*i kes*, *ku kes*, *ce kes* (これ、それ、あれ) になるが、中世語では指示代名詞 *i*, *ku*, *tye* だけでもモノやヒトを指すことができた。まず中世韓国語 (15-16 世紀) の状況を見ると、(43) は指示代名詞の名詞句用法、(44) は修飾用法であるが、両方とも *kes* のない指示代名詞が用いられている。つまり、名詞句用法であっても *kes* が現れない。また (43b) はヒトを指す場合であるが、ここでも指示代名詞 *tye* だけで十分である。5.1 節で見たように、現代語の場合は、指示代名詞の後にヒトを表すための名詞句用法標識 *i* がくるか、名詞 *salam* (人) がきて、*ce i* (あの人) または *ce salam* (あの人) のように直す必要がある。ただし、後者の場合は *ce* が名詞 *salam* を修飾する修飾用法となり、名詞句用法ではなくなる。

中世韓国語（15-16 世紀）

<指示代名詞の名詞句用法>

- (43) a. *tye-nAn i-lul olo cap-ko i-nAn tye-lul*
 あれ TOP これ-ACC 完全に 掴む-CONJ これ-TOP あれ-ACC
nAnhwa cap-uni [圓覺經上 1: 76b] 1465
 分ける.CONJ 掴む-のである
 「あれはこれを完全に掴み、これはあれを分けて掴むのである」
- b. *tye-nAn em-uy olap-uykey na-n-i-I-ta.* [翻訳老乞大上 16a] 1517
 あの人-TOP 母-NMLZR 兄-DAT 生まれる-PST.NMLZR-NPM-POL-IND
 「あの人は（うちの）母の兄から生まれた者でございます」

<指示代名詞の修飾用法>

- (44) a. *tye nalah-ay nakocye wuenhA-l-h salAm-An*
 あの 国-LOC 生まれようと 願う-FUT.NMLZR-NMLZR 人-TOP
 「あの国に生まれるのを願う人は」 [月印釋譜 8: 46b] 1459
- b. *ku wang-i nilotAy* [月印釋譜 20: 64a] 1459
 その 王-NOM 曰く
 「その王曰く」

(以上、中世語コーパス資料)

指示代名詞に *kes* が付かないのは、次のように、釋讀口訣で書かれた 13 世紀の文献にも同様に見られる。

古代韓国語（13 世紀）

<指示代名詞の名詞句用法>

- (45) a. *是-lul 彼-uy 修習對治 -ye ho-li-in-tye* [瑜伽 08: 10-12]
 これ-ACC あれの 修習對治-COPCONJ する-FUT.NMLZR.NPM-COP.NMLZR-IND
 「これをあれの修習對治というのである」 (張他 2015: 175)
- b. *此-lul 除 (tel)-kokun* [瑜伽 04: 05-06]
 これ-ACC 除く-ては
 「これを除いては」 (張他 2015: 124)

<指示代名詞の修飾用法>

- (46) a. 即 此 解脱圓滿 -ul 名 (il)-ha [瑜伽 05: 14]
 即ち この 解脱圓滿-ACC 称して
 「即ち、この解脱圓滿を称して、」 (張他 2015: 141)
- b. 此 四種 所作事 -s 中 -akuy pantAk alo-ta... [瑜伽 09: 03-04]
 この 四種 所作事-の 中-LOC 必ず 知る-IND
 「この四種類の行いごとの中で、必ず知っておくべきである、」 (張他 2015: 181)

一方、現代韓国語においてモノを指す場合の指示代名詞は、(47) のように名詞句用法には必ず指示代名詞の後に *kes* が用いられる。しかし、修飾用法になると、(48) のように *kes* は現れない。このことから、*kes* は当該指示代名詞が（修飾用法でなく）名詞句用法であることを明示するために用いられた名詞句用法標識であると判断できる。

現代韓国語

<指示代名詞の名詞句用法>

- (47) a. *i kes hako ce kes-ul cwu-sey-yo*
 これ と あれ-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「これとあれをください。」
- b. **i hako ce-lul cwu-sey-yo*
 これ と あれ-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「これとあれをください。」

<指示代名詞の修飾用法>

- (48) a. *i chayk hako ce kabang-ul cwu-sey-yo.*
 この 本 と あの カバン-ACC くれる-HON-POL.IMP
 「この本とあのカバンをください。」
- b. **i kes chayk hako ce kes kabang-ul cwu-sey-yo.*
 これ 本 と あれ カバン-ACC くれる-HON-POL.IMP
 Lit. 「これ本とあれカバンをください。」

歴史コーパス資料 UniConc から、各世紀ごとに *kes* が付く指示代名詞の使用状況を調査してみると、次のような結果が得られた。指示代名詞に *kes* が付くのを DEMONSTRATIVE-*kes* とすると、下記の表の横列の数字は、「DEMONSTRATIVE-*kes* + 主格・対格・主題」の三項

目をそれぞれ検索し、その使用件数を合算した数値である。＜表 7＞によると、*kes* が付く指示代名詞は 15 世紀にはすでに現れており、17-18 世紀からは徐々に使用頻度を増やしていき、19-20 世紀になって一般化したという結論が得られる。またこの状況を先導しているのは、近称の指示代名詞 *i* であることがわかる。

＜表 7＞ *kes* が付く指示代名詞の歴史的推移

調査項目	15C	16C	17C	18C	19C	20C 初
<i>i-kes</i> -NOM/ACC/TOP	14	12	65	143	658	971
<i>ku-kes</i> -NOM/ACC/TOP	0	1	4	6	103	107
<i>tye/ce-kes</i> -NM/AC/TOP	3	0	2	1	8	10
合計	17	13	71	150	769	1088

以上から、現代韓国語の指示代名詞（体言）に付く *kes* は、歴史的に後になって現れたものであり、機能的には修飾用法との区別を図るとともに、名詞句用法本来の指示対象を明確に指し示すために用いられた名詞句用法標識 *kes* であることがわかる。つまり、*kes* はモノの意味を表す名詞（の一種）ではないということである。ただし、指示代名詞の場合は、*kes* が指示代名詞に直接付く点で、他の名詞（人称代名詞や普通名詞）と異なっている。指示代名詞以外は、(49) のように名詞に体言化辞（いわゆる属格）が現れてその後に *kes* が付くが、指示代名詞の場合は体言化辞は現れず、直接 *kes* が付くという特徴がある。

- (49) a. *na.y kes-ul* [釋譜詳節 11: 43a] 1447
私 .NMLZR NPM-ACC
「私のを」
- b. *ku wuy-s kes-ul* [月印釋譜 25: 29b] 1459
その上-NMLZR NPM-ACC
「その上のを」
- c. *twu kaci-s kes-ul* [救急簡易方 2: 13a] 1489
二 種類-NMLZR NPM-ACC
「二種類のモノを」
- c. *kwuy-s-kes-ul* [釋譜詳節 24: 22a] 1447
鬼-NMLZR-NPM-ACC
「鬼の類を」

（以上、中世コーパス資料）

6. まとめと結語

本稿では Shibatani の体言化理論を援用した新しい分析を試み、文法的体言化に用いられる体言化辞と名詞句用法標識の関係、およびこの二つの機能を担う形式について、歴史的発達の観点から以下のことを述べた。

(i) 現代韓国語は、体言化辞と名詞句用法標識がそれぞれ異なる形式で表される。すなわち、用言基盤の体言化辞は *-n*, *-l*、体言基盤の体言化辞は *-uy*, *-s*、そして名詞句用法標識 *kes* である。名詞句用法標識 *kes* は名詞句用法にのみ現れ、修飾用法には現れないが、両方とも体言化によって作られた準体言 $[[VP/NP- \text{体言化辞}]_{NMLZ}]_{NP}$ を共通項としてもつ。現代韓国語の体言化構造は次のようである。

- ・用言基盤準体言： $[[VP-n/l]_{NMLZ} \text{ kes } NPM]_{NP}$ (名詞句用法)
 $[[VP-n/l]_{NMLZ} + \text{名詞}]_{NP}$ (修飾用法)
- ・体言基盤準体言： $[[NP-uy/s]_{NMLZ} \text{ kes } NPM]_{NP}$ (名詞句用法)
 $[[NP-uy/s]_{NMLZ} + \text{名詞}]_{NP}$ (修飾用法)

(ii) 現代韓国語と異なり、古く (中世韓国語およびそれ以前において) は、*kes* がなくても名詞句用法の準体言を作ることができた。つまり、*kes* は歴史的には後発であり、それまでは用言基盤の体言化辞 *-n*, *-l*、体言基盤の体言化辞 *-s* ($\leftarrow h$) だけで、名詞句用法・修飾用法を両方とも作ることができ、ヒト・モノ・コトを表す準体言として成立したのである。一方、体言化辞 *-uy* は修飾用法にのみ用いられた。このことから、*kes* はモノの意味を表す名詞 (の一種) などではなく、当該の名詞句が (修飾用法でなく) 名詞句用法であることを明示的に示すために用いられた名詞句用法標識であることが実証できる。

- ・用言基盤準体言： $[[VP-n/l]_{NMLZ}]_{NP}$ (名詞句用法)
 $[[VP-n/l]_{NMLZ} \text{ 名詞}]_{NP}$ (修飾用法)
- ・体言基盤準体言： $[[NP-s (\leftarrow h)]_{NMLZ}]_{NP}$ (名詞句用法)
 $[[NP-uy/s]_{NMLZ} \text{ 名詞}]_{NP}$ (修飾用法)

(iii) 韓国語の名詞句用法標識には、古くは *-i* があり、また *-i > kes* への歴史的展開があったと見られる。これにより *kes* の勢力が拡大し、現代語ようになった。つまり、現代韓国語の状況は、まず名詞句用法標識がない段階、次に名詞句用法標識が現れる段階、それから名詞句用法標識が *-i* から *kes* へと交代し、*kes* の勢力が拡大していく段階と、3段階の歴史的発達の過程を経て得られたものと考えられる。またこの *-i* は、中世韓国語では体言基盤の体言化辞としても用いられ、名詞句用法標識 *-i* はこの体言化辞 *-i* がその起源であり、そこから転用されたものと考えられる。

(iv) 指示代名詞も、古くは *i, ku, tye* (これ、それ、あれ) が用いられ、モノだけでなくヒトを表す場合でも用いられた。つまり、モノを指す場合でも *kes* は現れなかったのである。現代語の *i kes, ku kes, ce kes* (これ、それ、あれ) のように一般化したのは、19-20 世紀になってからである。ただし、他の体言 (人称代名詞や普通名詞) は必ず体言化辞の後に *kes* が付く (NP-NMLZR-*kes*) が、指示代名詞は直接 *kes* が付く点で異なる。

以上の分析は、指示代名詞を除くと、*kes* の前にくる要素は体言化辞でなければならないこと、そして、体言化は *kes* と独立して行なわれることを表すものである。このような分析は、言語の歴史的事実および歴史的発達の産物である現代韓国語の事実の両方と合致する点で、言語分析における体言化理論の必要性を示したものと考えられる。

【略語一覧】 ACC: accusative, CONJ: conjunctive form, COP: copular, FUT: future, GEN: genitive, HON: honorific, IMP: imperative, IND: indicative, INT: interrogative, LOC: locative, NMLZ: nominalization, NMLZR: nominalizer, NOM: nominative, NP: noun phrase, NPM: NP-use marker, PL: plural, POL: polite, PRF: perfect, PRS: present, PST: past, TOP: topic

【参考文献】

(韓国語文献はハングル順、日本語文献はアイウエオ順、英語文献はアルファベット順。韓国語文献については、漢語がハングルで表記された箇所は漢字に直して表記する。)

南廣祐 (編) (1971/1994) 『補訂古語辭典』 一潮閣。

南豊鉉 (2000) 『吏讀研究』 太學社。

安秉禧 (1968) 「中世國語의 屬格語尾「-ハ」에 對하여」(中世国語の属格語尾 -s について) 『李崇寧 博士 頌壽記念 論叢』 335-345. 乙酉文化社。

安秉禧・李光鎬 (1990) 『中世國語文法論』 學研社。

李光鎬 (1986) 「未知의 ‘이’ 를 찾아서」(未知の ‘i’ を求めて) 『國語學論叢』 5: 67-83. 國民大學校語學研究所。

李崇寧 (1975) 「中世國語의「것」의 研究」(中世国語の *kes* の研究) 『震壇學報』 39: 105-138. 震壇學會。

任洪彬 (1974) 「名詞化의 意味特性에 對하여」(名詞化の意味特性について) 『國語學』 2: 83-104.

張景俊・O Min-Sek (오민석)・Mwun Hyen-Swu (문현수)・He In-Yeng (허인영) (2015) 『『瑜伽師地論』 卷 20 釋讀口訣 譯注』 亦樂出版社。

張淑英 (2008) 『翻訳朴通事諺解 (上) 注釋』 韓國文化社。

丁烈牟 (정렬모) (1946) 『新編 高等國語 文法』 韓國文化社。

周時經 (1910) 『國語文法』 博文書館。

- 崔鉉培（1932）「不完全한 이름씨에 대하여」（不完全な名詞に付いて）, *Hangul*（ハングル學會影印本）1-5: 210-213.
- 崔鉉培（1937/1994）『우리말본』（我が言葉の語法）正音社．
- 黄善曄（1997）「中世國語의 ‘이’ 脱落 名詞에 대하여」（中世國語の -i 脱落の名詞に付いて）『蔚山語文論集』12: 203-213.
- 許雄（1973）「15 世紀 國語 매인이름씨의 分類」（15 世紀國語の依存名詞の分類）『李殷相博士古稀記念論文集』81-93.
- 許雄（1975）『우리 옛말본—15 世紀 國語形態論—』샘文化社．
- 金水 敏（1995）「日本語のいわゆる N' 削除について」阿部泰明・坂本正・曾我松雄（編）『第 3 回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム報告書』153-176. 南山大学．
- 柴谷方良（2014）「準体助詞をめぐる諸問題—共時論ならびに通時論的観点から—」『日本語言語学会第 149 回大会予稿集』4-9. 公開シンポジウム「現代語研究と歴史的研究の接点」（於愛媛大学）．
- 柴谷方良・鄭聖汝（2019）「誤用『赤い花』はなぜ起こるか？」東南大学招待講演（中国、南京）．講演スライド資料．2019 年 6 月 3 日
- 鄭聖汝（2020）「韓国語における疑問文の形成と体言化—慶南方言・濟州方言の名詞述語疑問文と動詞述語疑問文を手掛かりに—」『言語研究』157: 1-36.
- 鄭聖汝（2021a）「体言化と名詞句用法標識の関係—歴史的發達の観点から見た日本語の「の」と韓国語 *kes* の比較を通して—」鄭聖汝・柴谷方良（編）『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会．
- 鄭聖汝（2021b）「韓国語の体言基盤体言化—いわゆる属格 -s の修飾用法と名詞句用法について—」鄭聖汝・柴谷方良（編）『体言化理論と言語分析』大阪大学出版会．
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』寶文館．
- Horie Kaoru (2011) Versatility of nominalizations: Where Japanese and Korean contrast. . In Foong Ha Yap, Karen Grunow-Harsta and Janik Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and typological perspectives*, 473-496. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Lee Hong-Bae (1970) *A study of Korean syntax: Performatives, complementation, negation and causation*. Seoul: Pan Korea Book Corp.
- Park Byung-Soo (1972) *A study of Korean verb phrase and noun phrase complementation with special attention to the verb ha*. Doctoral dissertation, University of Pittsburgh.
- Rhee Seongha (2011) Nominalization and stance marking in Korean. In Foong Ha Yap, Karen Grunow-Harsta and Janik Wrona (eds.) *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and typological perspectives*, 393-422. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibatani Masayoshi (2013) What can Japanese dialects tell us about the function and development of the nominalization particle 'no'? *Japanese/Korean Linguistics* 20: 421-444.

- Shibatani Masayoshi (2017) Nominalization. In M. Shibatani, S. Miyagawa and H. Noda (eds.), *Handbook of Japanese Syntax*, 271–332. Berlin: Walter de Gruyter.
- Shibatani Masayoshi (2018) Nominalization in crosslinguistic perspective. In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.), *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 345–410. Berlin: Walter de Gruyter.
- Shibatani Masayoshi (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization, in Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani and David W. Fleck (eds.) *Nominalization in Languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibatani Masayoshi and Sung-Yeo Chung (2018) Nominal-based nominalization. *Japanese-Korean linguistics* 25: 63–88.
- Shibatani Masayoshi and Hiromi Shigeno (2013) Amami nominalizations. *International Journal of Okinawan Studies*, Vol 7: 107–135.
- Yang In-Seok (1972) *Korean syntax: Case markers, delimiters, complementation, and relativization*. Seoul: 百合出版社 .

The relationship between nominalization and NP-use marker: Focusing on the historical development of Korean ‘*kes*’

CHUNG Sung-Yeo

[Abstract]

This paper puts a focus on a Korean grammatical marker ‘*kes*’, which has been regarded as a formal noun in Korean traditional grammar, and provides a reanalysis for its related forms in terms of the theory of nominalization that has newly been proposed by Shibatani (2017, 2018, 2019). We observe that, diachronically speaking, the use of ‘*kes*’ for the nominal structure can be said as a relatively recent grammatical innovation and in fact the language allowed the nominalization (quasi-nominals) to be formed without ‘*kes*’ in the middle Korean. These facts indicate that ‘*kes*’ is not a formal noun as traditionally classified, but it is an NP-use marker of the nominalized structure, and it is the elements preceding ‘*kes*’ that should be analyzed as a true nominalizer. We also point out that the Korean NP-use markers have historically shifted from ‘*-i*’ to ‘*kes*’. With these historical facts, we propose that the structural analyses that have been previously proposed like (i) [VP-adnominal forms + *kes* (formal noun/ dependent noun/ nominalizer)] and (ii) [NP-genitive case + *kes* (formal noun/ dependent noun)] have to be reanalyzed as follows:

- Verbal-based nominalization (NP-use): [VP-nominalizer *-n/l* + *kes* (NP-use marker)]
- Nominal-based nominalization (NP-use): [NP-nominalizer *-uy/s* + *kes* (NP-use marker)]

The essence of this analysis lies in the points that the elements before ‘*kes*’ always serve as the nominalizer, and that the nominalized structure, whether verbal-based or nominal-based, is formed independently of ‘*kes*’. Our analysis is superior to the previous analyses in that it accommodates the historical development as well as the modern usage of ‘*kes*’.

Key words: nominalization theory, verbal-based nominalization, nominal-based nominalization, nominalizations, nominalizer, NP-use marker, historical development